

## 広島県のノタヌキモの産地

内山 寛

ノタヌキモ *Utricularia aurea* は、日本では関東地方以西に分布しているが、中国地方にはその産地はほとんど知られていない。特に広島県内にはその産地が全く知られていないようである。そこで、ここに広島県内の産地を紹介する。

筆者が、広島県内で初めてノタヌキモの産地を確認したのは1983年8月のことで、それは世羅郡世羅西町黒川周辺にある4ヶ所のため池と、同郡世羅町重永および御調郡久井町和草にあるそれぞれ1ヶ所のため池であった。この地域は、山地平坦面の高さが海拔300mから400mの範囲にあって、一般に世羅台地と呼ばれており、いわゆる吉備高原の一部にあたる。地質的には、その基盤の大部分は花こう岩からなっているが、一部には古生層などが分布している。平坦地は水田として利用され、灌がい用のため池が多く、山地はほとんどがアカマツ林で被われているが、近年大規模な農地開発が行われている。灌がい用のため池は水深が比較的に浅いため水生植物の被度が高い池も多くみられる。代表的な水生植物としては、コウホネ類、ヒツジグサ、ジュンサイ、ヒシ、ヒルムシロ類などがあげられる。

ノタヌキモの生育していたため池のうち世羅町にあるため池には発見以来毎年その開花期に訪れている。また、そこで採集したものを現在栽培しており、写真は栽培中に開花結実したものの腊葉標本を写したものである。なお、世羅町のため池にはノタヌキモの他に、ヒツジグサ、ホンバミズヒキモ、ホッスモ、ヤナギスブタなどが生育している。

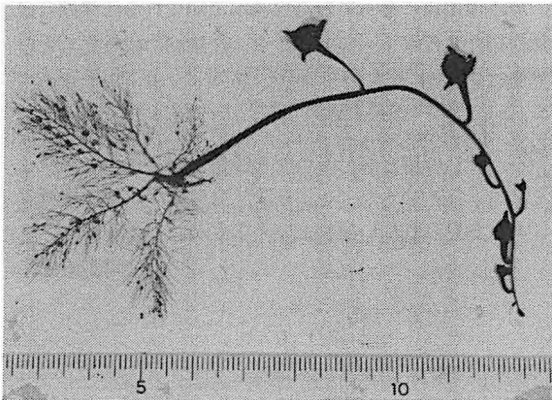


写真 ノタヌキモ

現在、筆者の知っているノタヌキモの広島県内の産地は上述の6ヶ所のみである。広島県全体でノタヌキモがどのように分布しているかは、特に県東部の調査が不十分でよくわかっていない。いずれ調べてみようと思っている。

## 知多半島における海塩生植物

磯部 亮一

知多半島は、1959年(昭和34年)の9月伊勢湾台風の影響で、有史最大といわれる高潮の被害をうけた。

そのため半島全沿岸に護岸堤防が築造されアシタバ・ハマグルマ・ハマエンドウ・ハマゴウ・コウボウムギ・ハマヒルガオ・スナビキソウ・タチスズシロソウ・コナミキ・ハマニガナ・ケカモノハシ・ダンチク・オカヒジキなど、海岸砂地に生育していた一律の海浜植物群落は、かなり変貌を余儀なくされた。

更に、高度成長期における名古屋南部工業地帯、衣浦臨海工業地帯の造成と相なり沿岸水路、河口はコンクリートで整備されて塩生植物は激減した。その後も塩性湿地や汽水性沼池など随所で埋立てられ、塩生水草の生育環境は年々と破壊されつつある。

昨年1986年夏以降、常滑市の海浜植物に詳しい中井三従美さんの協力で、半島内の海塩生植物を現地調査した。残存僅かな汽水性沼池に生育するカワツルモなど再確認したので、今回の知見と合わせて、往年の記録を加え概略ながら報告しておく。

沈水性のカワツルモは、伊勢湾側の美浜町奥田塩田跡に、又常滑市榎戸海岸に生育記録が残っている。現在、常滑市の生育地は宅地開発のため埋立てられ消滅。美浜



写真1. 知多半島で唯一東浦町のシバナ (1986.11.10)

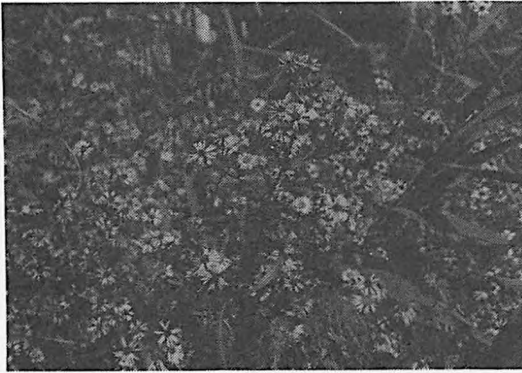


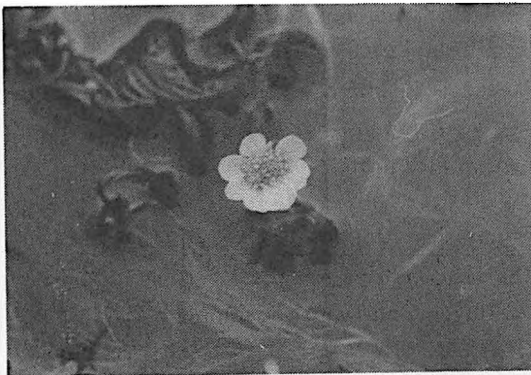
写真2. 常滑市鬼崎地区のウラギク (1986.11.2)

町の塩田跡地には、南知多ビーチランドが建設開園されているが、一角の沼池に群生が残存している。

抽水性のシバナについては、伊勢湾側の知多市、常滑市、美浜町と衣浦湾の最奥部境川にその生育記録がみられる。伊勢湾側の生育地はすべて消滅。現在、衣浦大橋北方の東浦町藤江の護岸堤防下に、小群生を確認するのみとなった。塩水の入る河口や用水に群生するウラギクは、まだ半島内各地でみられ、水質汚染に耐えて咲く花はたくましい。

## バイカモの8弁花

角野康郎



バイカモの花弁は5枚がふつうで、注意しているとまれに6枚のものがある。ところが、昨年12月13日、兵庫県水上郡青垣町の佐治川(加古川上流)で開花中の花の中に8弁のものを1コ見つけた。珍しい例ではないかと思うので、写真で紹介しておきたい。

ところで、バイカモの花期について手元の文献をみる

と、6~8月としているもの(佐竹他編『日本の野生植物』など)から、3~11月(大滝・石戸著『日本水生植物図鑑』)としているものまでであるが、私自身の観察によるともう少し長いようだ。事実、上記の観察も12月中旬のもので、いかに暖冬とはいえ狂い咲きといった性質のものとは思われなかった。では、真冬にはどうなるのかと思い、去る2月7日に現地の様子を見に行った。バイカモはあざやかな緑色で元気よく育っていたが、さすがに水面上に出て咲いている花はなかった。しかし、水中で開花中の花をいくつか認めたほか、つぼみは次々と発達していることが確認できた。実がたくさんあったことも、ごく最近の開花を示唆していた。ちなみに当日は暖かい日で、正午の水温は9.2℃であった。

豊富な湧水があって冬も水の暖かい所では、一年を通して開花が続くのではないかというのが私の予想である。身近にそのような場所のある方に、ぜひ確かめていただきたいものと思っている。

## ○文献リスト<1986—(2)>

- 井上裕靖・植木邦和. ホテイアオイの密生群落形成過程について. ホテイアオイ研Newsletter (9): 2-6.
- 薄葉 満. イセウキヤガラを福島県に記録する. 東北植物研究 (3): 18.
- 大隈光善. 筑後川下流域のクリーク雑草「チクゴズズメノヒエ」の生態と防除. 雑草研究 31: 108-115.
- 沖 陽子. 水生植物利用学会に参加して. ホテイアオイ研Newsletter (9): 17-19.
- 小田中敏男. ホテイアオイの密度管理と在庫システム. ホテイアオイ研Newsletter (9): 13-14.
- 桃田聖孝・清水正元. ホテイアオイサイレージの実用的調整法に関する研究. ホテイアオイ研Newsletter (9): 6-8.
- 栗原 康・佐藤雅志・吉田輝久・森 忠洋. ヨシ(Phragmites australis)を利用した下水汚泥のコンポスト化とその水稻への施用効果. 日本土壤肥料科学雑 57: 442-446.
- 汐見信行・鬼頭俊而. アカウキクサの多目的利用. 水処理技術 27: 123-130.
- 種坂英次. ヒエ属多年生種, Echinochloa stagina